

アチェにおける災害リスク軽減のためのメディアの対応

ヤルメン・ディナミカ スランビ・インドネシア社
Yarmen Dinamika (Serambi Indonesia)



今日はコンパス社のベピさんといっしょにお話しできることをうれしく思います。みなさんご存じのとおり、アチェのスランビ・インドネシア社(スランビ社)はコンパス社と提携を結んでいる関係にあります。コンパス社は各地方の新聞社を積極的に支援し、関係をつくってきました。とくにコンパスはインドネシアでも有数な主要なメディアですので、いっしょに協力できることはアチェにとってもありがたいことです。

今日は、災害対応にあたってのメディアの役割や戦略についてお話ししたいと思います。とくにアチェの事例についてお話しします。

■ 250名もの関係者を失った衝撃を各所の協力で乗り越えて

津波でスランビ社では25人の記者が亡くなりました。スランビ社に關係する家族を含めると死者の数は250人にのぼります。当然ながら、スランビ社は被災後にまったく機能なくなりました。しかし、コンパス紙にスランビ・インドネシアのコーナーを設けていただいたため、その意味ではスランビ・インドネシアの名前は津波直後も消えていなかったといえます。

津波直後、職場や道具を失った私たちスランビ社の記者はなかなか仕事ができませんでした。しかし人びとは情報を欲していました。そのような状況で実際に報道に携わってくれたのは、インドネシア各地からアチェに取材できたコンパス社の記者たちでした。彼らが3か月間にわたってスランビ社の記事を書いてくれて、それによって私たちは非常に助けられました。

幸運だったのは、スランビ社が津波の前から印刷所を複数もっていたことです。スランビ社の本社は津波の直撃を受けて使えなくなりましたが、バンダアチェからメダンの方に車で5、6時間行ったところにあるロクスマウエ市にスランビ社の印刷所がありました。編集はバンダアチェで行ない、印刷はロクスマウエで行なって、スランビの新聞はロクスマウエから発行されていました。

■ 地震・津波・火山噴火が頻発するアチェで災害報道に携わる意識と態勢

続いて、私たちスランビ社の記者が災害の報道に携わるにあたってどのようなことを意識しているかご紹介したいと思います。

私たちがまず意識しているのは、アチェが火山や地震の災害が起こりやすい地区にあるということです。アチェで暮らす以上、災害について考えないわけにはいきません。

なぜアチェが災害に見舞われやすいのかという話をするときに、研究者や専門家であれば、おそらく「三つの大陸プレートの境目にあるため」と説明するでしょう。しかし私たち記者は、人びとが十分に理解できるように、たとえば「アチェは水に浮かぶせんべいのようなもので、ちょっとしたことでとても揺れる」という説明の仕方をします。私たち記者は、一般の人びとに読んでもらい、理解してもらうように、さまざまな工夫をしなければならないのです。

2004年に起こった地震は非常に大きな地震で、アチェだけでなく広い地域に津波を引き起こす大きさをもったものでした。あまりにも大きかったため、マグニチュードがどのくらいかはいろいろな議論があり、現在はマグニチュード9.3となっています。チリで起こった地震はマグニチュード9.5だと聞いています。

アチェではその後、余震が続きました。2004年末から2005年10月までに地震はおよそ9,000回ありましたが、そのうち人が感じたのは300回だけでした。この地震は長さ1,000キロにわたる範囲で大きな変動があったために起こったものです。このような大きな地震が起こったため、その後の余震も8,000回以上に及んだのです。

アチェには四つの火山があります。アチェで地震が起こりやすい原因のもう一つはそこにあります。インドネシア科学院の専門家によれば、これからまだスマトラ地域で大きな地震が起こる可能性があります。

アチェで起こりやすい災害でもっとも多いのは洪水、それから地震、地滑り、大波と続きます。このような情報は、私たち報道に携わる者としてはみな知っていなければいけないことです。スランビ社では、記者のすべてがこのような科学的な知識をきちんと踏まえて記事を書けるように、ワークショップ等を行なっています。

■ 災害時に読者にとって有用な情報を提供するために

災害時に重要なのは、まさに情報です。ラジオや新聞が機能しないことが災害時にもっとも予想され、備えられるべきことです。また、私たちは新聞を通じて

人びとにある種の警報を発していると考えています。津波だけでなく、台風や干ばつなどのさまざまな危機をいち早く伝えることが、いわゆる警報の役割を果たしていると考えています。

ただし、報道にあたっては、記者が命を落とすことがないようにも気をつけています。また、読者がなんらかの利益を得られるようにといったことも考えています。読者の利益については、「いつ、どこで、なにが起こったのか」という事実、それから「それが自分にとってどんな意味をもつのか」、「なにをすべきなのか」といった点に読者は関心をもっているということを意識しています。



大アチェ県ランブウ地区にあるモスク周辺の被災直後(2005年2月)の写真(上)と復興後(2011年8月)の写真(下)。周辺の住宅は津波によって流され、モスクだけが残った。現在はトルコ赤新月社が建設した復興住宅郡が立ち並ぶ

